おとなとこどもの自由研究　工芸の光と影展

Light & Shadow for Crafting Crafts: Independent Study for Kids & Adults

2024年6月18日［火］ー 8月18日［日］

鈴木長吉《十二の鷹》（部分）1893年
国立工芸館蔵　重要文化財
撮影：斎城卓

開館時間：午前9時30分～午後5時30分
夜間開館：7月19日（金）～8月17日（土）の金曜土曜と8月11日（日・祝）は午前9時30分～午後8時
※入館はいずれも閉館の30分前まで
休館日　：月曜日（ただし7月15日、8月12日は開館）、7月16日（火）
観覧料　：一般　300円（250円）／大学生　150円（70円）
＊夜間開館日の午後5時30分以降は、一般 150円／大学生 70円
＊（）内は20名以上の団体料金および割引料金。＊いずれも消費税込。
＊オンラインによる事前予約もあり。
＊高校生以下および18歳未満、65歳以上、MOMATパスポート・学パスをお持ちの方、友の会・賛助会員の方、MOMAT支援サークルパートナー企業（同伴者1名まで、シルバーパートナーは本人のみ）、キャンパスメンバーズ、文化の森おでかけパス（一般のみ）をお持ちの方、障害者手帳をお持ちの方と付添者（1名）は無料。
○割引対象：石川県立美術館・金沢２１世紀美術館・石川県立歴史博物館・
石川県立伝統産業工芸館（いしかわ生活工芸ミュージアム）・
金沢市立中村記念美術館・金沢ふるさと偉人館の主催展覧会入場券半券を窓口で提示した方。
主催　　：国立工芸館
掲載用問い合わせ先：050-5541-8600（ハローダイヤル）

光と影のコントラストとハーモニーをあじわう
約100点の工芸作品をご紹介

展覧会概要

光と影。それは自然・人工を問わず日々目にするもの。物理で語ることながら、心理への働きかけも少なからず、まったく意識にのぼらないこともあるのに、ひとたび注視すれば時が経つのも忘れさせるほどです。原初的な畏怖から私たちを救い出し、富貴や理想の表象ともなって憧れを募らせる光。他方の影は底知れなさもまた魅力で、そこに情趣さえ読み取ろうとするのは、陰翳礼讃の気風があるわが国ならではの美意識かもしれません。
本展は工芸が切り取って見せた光と影のそれぞれの方向、そしてその間で無段階に変化する美しさを訪ねる試みです。物質感を豊かに抽出し、複雑さと合理性とを兼ね備えた構造から成る工芸。そこは光と影にとって絶好の舞台装置ともいえます。また、身近ではあっても決して触れることのできなかった現象を掌中に包み込み、身にまとうことさえできるのも工芸ならではの喜びです。
夏のひととき、光と影のコントラストとハーモニーをお楽しみください。

※会期中一部展示替いたします［前期：6/18〜7/21｜後期：7/23〜8/18］

展覧会のポイント

- 工芸作品を前に思わずこぼれでる感動のため息。その源泉を訪ね、あじわいます。
- おとなとこどもそれぞれの楽しみかた・深めかたをご提案する各種プログラムをご用意。
- 「芽の部屋」はイサム・ノグチの《あかり》で設えた光と影の体感スペースに。“光の彫刻”が築く空間でくつろぎのひとときをどうぞ。

展示構成

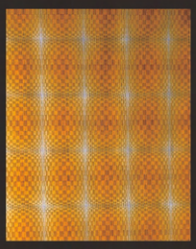
展示室1　光？影？ ／ 光と影でモノがたる

作品の表層に、あるいは構造に浮かび上がる光と影の様子を目で追いかけましょう。見る角度が少し動けば入れ替わりもする捉えがたさが作品の魅力を深めます。その妙なる界域を探るうちに呼び起こされる情景は、新鮮なのにどこか懐かしくもあり。見る人の心理に寄り添い、経験や記憶と結びついて豊かさを増す光と影の物語をお楽しみください。

小川雄平《陶製黒豹置物》（部分）
1933年　国立工芸館蔵

松田権六《蒔絵竹林文箱》
1965年　国立工芸館蔵

関谷四郎《赤銅銀十字線花器》
1975年　国立工芸館蔵


土屋順紀《紋紗着物　月光》（部分）
2001年　国立工芸館蔵

展示室2　光と影でカタチつくる

色、かたち、質感。工芸をつくり出すさまざまな要素にも光と影は強く作用します。たとえば微細な鎚跡（つちあと）に潜む影。エッジに走る光と競いあって立体感を深めてはいないでしょうか。釉薬のつややかな層に触れれば実態のないこの現象を包み込んだかのような心地にもなります。作者が仕掛けた光と影のわざを、あなたは幾つ見つけられる？

展示室3　メタル＆ガラス

光と影は物質を介して多様な相を展開します。なかでも金属とガラスに見る光の吸収と透過、反射や散乱とそれに呼応する影の効果はまた格別で、主題を際立たせ、制作の目的ともなってきました。この部屋では2種の素材に限定し、そこでセンシティブな反応を示す光と影とを対照してみましょう。《十二の鷹》（重要文化財）も前後期あわせて6羽登場。鋭い爪やふっくらとした羽毛の生命感に宿る陰影の美をお見逃しなく。

鈴木長吉《十二の鷹》（部分）
1893年　国立工芸館蔵

高橋禎彦《花のような》
2004年　国立工芸館蔵

イベント＋

▶ 東京で人気だった「スタンプラリー」と「みんなでつくる工芸図鑑」が金沢で始動

スタンプラリー付きのセルフガイド、そして絵と言葉で作品のみどころを他の鑑賞者に伝えるワークシートを中学生以下の方にご用意しました。アウトプットで学習効果を高めながら、みんなで鑑賞をシェアしましょう。鑑賞を助けるジロメガネ、鑑賞の記念にもらえるオタノシミニギフトも。先着1000名。

▶ おとなのための「自由研究ノート」とワークショップ

工芸をめぐる光と影のメカニズムや作者の想いなどをご紹介するおとなのためのセルフガイドをさしあげます（なくなり次第終了）。また光と影の境目を指先でたどるワークショップも開催予定。多言語音声ガイドも活用すればあなたの目に映る光と影はますます広がり、深まるかも。

▶ 工芸トークオンライン（日本語・英語）

展覧会の予習に、あるいはふりかえりに。カフェでまったりおしゃべりする雰囲気を楽しみながら工芸のディープな魅力にふれるひとときです。

＊詳細やその他のイベント情報はホームページをご確認ください。
＊国内外の状況により記載内容に変更が生じる場合があります。

記者発表会・内見会

一般公開に先駆けて報道関係の皆さまのみの発表会、および内見会を行います。

6月17日（月）　午前11時30分～午後1時（受付開始　午前11時30分）

参加ご希望の方は、申込書に必要事項をご記入の上、メールまたはFAXでご連絡ください。

次回展予告

2024年9月6日（金）—12月1日（日）

心象工芸展

本展では沖潤子、佐々木類、髙橋賢悟、中川衛、中田真裕、松永圭太の6名の作家による、心象風景や社会との関わりをモチーフとした工芸作品をご紹介します。素材への理解や高い技術、用途性といった工芸らしさに加え、今の時代を生き、自己の内面を表現する現代の美術家としての彼らの作品をお楽しみください。

沖潤子《scarlet》
2023年　個人蔵

国立工芸館
National Crafts Museum

〒920-0963　石川県金沢市出羽町3-2
https://www.momat.go.jp/craft-museum

アクセス：

バスにて　JR金沢駅兼六園口（東口）より
【北鉄バス】
3番乗り場：どの系統でも乗車可、「広坂・21世紀美術館(石浦神社前)」下車徒歩7分
6番乗り場：乗車(「柳橋」行を除く)、「出羽町」下車徒歩5分
8番乗り場：どの系統でも乗車可、
「広坂・21世紀美術館(しいのき迎賓館前)」下車徒歩9分

車にて　北陸自動車道金沢西ICまたは金沢森本ICから20～30分。
近隣に文化施設共用駐車場（無料）があります。

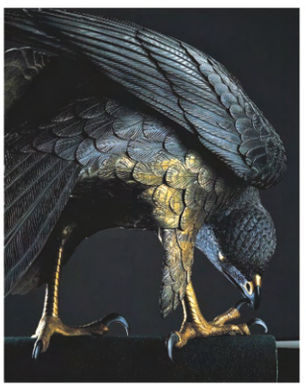
報道関係の方のお問い合わせ先

国立工芸館　広報事務局（株式会社OHANA内）
Tel：03-6869-7881　Fax：03-6869-7801
Email：ncm@ohanapr.co.jp

広報用画像一覧

図版No.1
鈴木長吉《十二の鷹》（部分）1893年
国立工芸館蔵　重要文化財
撮影：斎城卓　［前期展示］

図版No.2
鈴木長吉《十二の鷹》（部分）1893年
国立工芸館蔵　重要文化財
撮影：斎城卓　［前期展示］



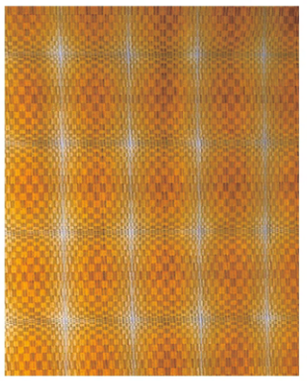
図版No.3
鈴木長吉《十二の鷹》（部分）1893年
国立工芸館蔵　重要文化財
撮影：斎城卓　［前期展示］

図版No.4
鈴木長吉《十二の鷹》（部分）1893年
国立工芸館蔵　重要文化財
撮影：斎城卓　［後期展示］

図版No.5
小川雄平《陶製黒豹置物》（部分）
1933年　国立工芸館蔵
撮影：斎城卓

図版No.6
松田権六《蒔絵竹林文箱》1965年
国立工芸館蔵
撮影：斎城卓

図版No.7
関谷四郎《赤銅銀十字線花器》1975年
国立工芸館蔵
撮影：斎城卓



図版No.8
土屋順紀《紋紗着物　月光》（部分）
2001年　国立工芸館蔵
撮影：斎城卓　［前期展示］

図版No.9
高橋禎彦《花のような》2004年
国立工芸館蔵
撮影：斎城卓

図版No.10
三代徳田八十吉《燿彩鉢　創生》
1991年　国立工芸館蔵
撮影：斎城卓

図版No.11
伊砂利彦《花火 ドビュッシー
「前奏曲集Ⅱ」のイメージより》
1985年　国立工芸館蔵
撮影：斎城卓　［後期展示］

図版No.12
田嶋悦子《Cornucopia 08-Y2》
2008年　国立工芸館蔵
撮影：斎城卓

上記画像No.1～12を広報用にご提供いたします。
ご希望の方は当館ホームページの画像提供システムよりお申し込みください。
https://www.momat.go.jp/craft-museum/reproduction

＊展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券（5組10枚）をご用意しております。
ご希望の方は画像申請の際に「その他」欄よりお知らせください。